パート１

訳してみて、練り上げていく作業、だいぶ身についてきたでしょうか？

翻訳力アップ自己トレ「メール講座 Next Stage１」「メール講座 Next Stage２」では、文の長さに気をつけ、会話体をうまく活用する練習をしていただきました。今回のポイントは、「早く続きが読みたい！」 と思うようなイキイキとした文章にすることです。ただし、正確であることが大前提ですので、ステキな言い回しを思いついたからと有頂天にならずに、「原文から離れていないか」は冷徹にしっかりとチェックしてくださいね。

著者の伝えたいことやそのモードやイメージに忠実に、しかもイキイキとした文章にするために、ご自分なりにいろいろくふうしてみてください。

Paragraph 1-2

Kids love to skateboard. Sidewalks and handicapped access ramps are perfect for skateboarding, from the kids' perspective. In Randolph, the downtown sidewalks were particularly good for skateboarding because the town is built on a slope, the sidewalks making a natural hill for the skateboarders. The town had gone to some trouble to put in new sidewalks, ramps, and other pedestrian amenities, and the facilities were in perfect shape for the sport. The skateboarders were having a great time. Part of the joy of the sport is the showiness of it—so being right downtown with a ready-made audience met their needs perfectly.

All was not well, however. Elderly pedestrians didn't like risking life and limb when they walked out of a store only to find themselves in the middle of a skateboard stunt ramp. Store owners complained. To make matters worse, skateboard wheels often left grooves in new and expensive sidewalks, so the town was faced with damage to its brand new infrastructure improvement project.

****

【パラグラフ１】

1) Kids love to skateboard. Sidewalks and **2) handicapped access ramps 3) are perfect for skateboarding, from the kids' perspective**. In **4) Randolph**, **5) the downtown sidewalks were particularly good for skateboarding** because **6) the town is built on a slope**, **the sidewalks making a natural hill for the skateboarders**. **7) The town had gone to some trouble to put in new sidewalks, ramps, and other pedestrian amenities, and the facilities were in perfect shape for the sport. 8) The skateboarders were having a great time.** Part of the **9) joy of the sport** is **10) the showiness** of it—so being right downtown with **11) a ready-made audience 12) met their needs perfectly.**

エダヒロ訳

若い子たちはスケートボードが大好きだ。歩道も身障者用スロープも、この子たちの目には、「スケボーにピッタリ！」と映る。ランドルフの町では、とりわけ商店街の歩道がスケボーにうってつけの場所なのだった。丘に立つ町なので、何もしなくても、歩道の勾配がスケボー少年たちにおあつらえむきなのだ。町では、さらに新しい歩道やスロープといった歩行者のための設備を作ったのだが、これがまたスケボーにうってつけ。若い子たちは思う存分楽しんでいた。スケボーの楽しさは、「見てもらえる喜び」でもあるのだが、商店街のど真ん中なら、たまたまそこにいる人たちがギャラリーになってくれるわけで、願ったりかなったりなのだ。

****

1）Kids love to skateboard.

最初の一文は、難しい単語も文法もなく、「楽勝！」に思える……。が、こういう文こそ、実は悩みどころであることが多い。これもそうね。特に、導入の文章は、そのあとのトーンや設定を決めてしまうことがあるので、細心の注意が必要。

たとえば、この文の kids をどう訳すか？　「キッズ＝子ども」というワンパターン・無条件反射的翻訳になっていないか？　（もちろん、キッズ＝子どもでよい場合もあるけど、意識して「子ども」という訳語を選ぶことが重要！）

この kids の訳語を決めるには、（１）文章全体を通読して、その行動からどのくらいの年齢層の人々を指しているかを考える、（２）わざわざこの単語を選んだ著者の kids への「距離感」や「感情」を想像してみる、などいくつかのフィルターが必要。同時に、kids の訳語としてどのくらいの幅の日本語が考えられるか、「ひとりブレスト」して候補を広げておくこと。

今回の文章でいうと、のちに「条例を変更するための行動」をしていることから、中学～高校生ぐらいだろうか。「子ども」と訳してしまうと、もっと低年齢のイメージにならないか？　とズレの可能性が気になる。同時に、著者の kids たちへの温かいまなざしから、親しみを込めて kids と称しているのだろう、と思えるので、「若い子たち」ぐらいでどうかな～？　もっとも何度も出てくる場合、いつもいつも「若い子たち」じゃなくて、「若者」「彼ら」など言い換えないと、ぎこちなくなりそうなので、そのあたりは柔軟に。

さて、kids の訳語を一応決めたところで、後半の love to skateboard はどう訳すかな？

これは文法的に言えば、to 不定詞であり、skateboard はここでは「スケートボードに乗る」という動詞である。きちんと to 不定詞を訳すのなら、「スケートボードに乗るのが大好きだ」「スケートボードをするのが大好きだ」となるが、声に出して読んでごらん、まどろっこしいような気がしない？　ここは「スケートボードが大好きだ」で歯切れよくいこう。

スケートボードのことは「スケボー」とも言うけど、それこそ若い子たち向けの媒体で、「スケボー」で最初から問題ないと断言できる読者対象でない限り、初出は「スケートボード」にしておいて、以降「スケボー」を使うのがよいだろう。つまり、あるグループにしか通用しない用語や略語は、その独特の雰囲気を伝えるには効果的な場合もあるけど、そのために「え？　スケボーってなに？」　と思ってそこで読むのをやめてしまう、または印象を悪くする読者がひとりでもいそうな場合は、慎重に丁寧に導入すべき、ということ。

翻訳者の力量は、どれだけの幅の読者を想定して訳せるか、にもかかっている。読者の反応が見えないので、その場で相手に確認したり、相手のようすを見て調整することはかなわない。とすれば、できるだけ対象読者を幅広くイメージして、抵抗を起こさせないように訳語を選ぶ必要がある。これができない翻訳者は「ひとりよがり」になってしまう。たまたま対象読者が一致していれば OK だが、そうで

ないと親切ではない翻訳になってしまうので要注意！　同時に、実際の仕事では、私は編集者や依頼者にしつこく「想定読者」のイメージを確認することにしている。これまでの経験から、「丁寧すぎると怒る人はいないが、親切でないと怒る人は多い」ので、迷うときには対象読者を広めに想定することにしている。

Sidewalks and **2)handicapped access ramps 3)are perfect for skateboarding, from the kids' perspective**.

この一文は、「早く続きが読みたい！」と思うようなイキイキとした文章にする（ただし、正確であることが大前提）という学習ポイント。

2）まず、単語から。**handicapped access ramps** は「障害者用進入スロープ」「車椅子用のスロープ」「身障者用のスロープ」などいろいろな訳し方ができるなあ。スロープがわかりにくいようだったら「傾斜通路」？

こういうときは、すぐに「どの訳語にするか？」と文字から文字へと行こうとするのではなく、「それってどういうもの？」「何を指しているの？」と、実際のモノを想像・理解して、「それを、いまの読者対象にわかってもらうには、どういう言葉を選べばよいのか？」と考えること。ざっと最後まで読んで、もし車椅子が出てくれば、「車椅子用のスロープ」がわかりやすいかも。ここではそうではなかったので、車椅子に限らずに、「身障者用スロープ」にしておこう。

3）この文自体は、「歩道も身障者用スロープも、スケボーにパーフェクトなんだよね、若い子たちの目からみるとね」という感じ。**from the kid’s perspective** のまえに「，」があって、このあととのあいだにわざわざ一息入れているので、そんなニュアンスが伝わってくるでしょう？　ただ、「若い子たちの目から見ると。」と倒置法で終わると、日本語ではなにやらゆかしく古めかしい感じがしてしまうので、英文が倒置法っぽかったとしても、日本語でそのままそうする必要はない。そのニュアンスというか、雰囲気をまず感じて、それを何らか反映できればハッピー！　である。こういう訳文なら、雰囲気も伝わってよさそう。

・歩道も身障者用スロープもこの子たちの目には、「スケボーにピッタリ！」と映る。
・若い子たちにとっては、歩道も身障者用スロープも、おあつらえ向きのスケボー場なのだ。
・若い子たちから見れば、歩道や身障者用スロープは、スケートボードにもってこいの場所である。
・この子たちから見たら、歩道や身障者用スロープなどは、スケートボードにうってつけの場所なのです。

下の訳例と比べてみて。

・歩道や身障者用スロープは、若い子の視点から見ると、スケートボードには最適です。
・歩道や身障者用スロープは、恰好のスケートボード場としてこの子たちの目には映る。
・歩道や身障者用スロープは、若い子の目から見るとスケートボードをするのに最適である。

こちらの訳例も「正しい」のだけど、まえにあげた四つは「ピッタリ！」「おあつらえ向き」「もってこい」「うってつけ」など、perfect をじょうずに訳して、イキイキとした雰囲気を出しているでしょう？「正しい」（正確である）訳文が、「イキイキした」「もっと読みたい！」と思える訳文とは限らないところが翻訳の難しいところであり、楽しいところである。正確な訳文が作れるようになったら、自分の訳文の「イキイキ度」をチェックしてみるようにしよう！

In **4)Randolph**, **5)the downtown sidewalks were particularly good for skateboarding** because **6)the town is built on a slope**, **the sidewalks making a natural hill for the skateboarders**.

4）まず、**Randolph** は地名であることはわかるが、市？　町？　それとも村？　これは調べないとわからない。ランドルフのホームページを見ると、township と書いてあるので、「市」と訳さない方がよさそう。http://www.gti.net/randolph/

迷うときには、たとえば google で、「ランドルフ市」「ランドルフ町」などで検索してみるのも手。もっとも google が拾ってくるウェブサイトの表示が正しいとはだれも保証できないので、圧倒的大差がついているとか、官公庁が使っているとか、そういう場合以外は頼らないほうがよいが……。ここでは「ランドルフの町では」という感じね。

5）さて次の **downtown** はどう訳すか、これもひとつのポイント。下町／中心街／繁華街／市中心部／町の中心地／市街地／ビジネス街／商業地区など、訳語のバラエティはいろいろあるが、「お店などがいっぱい集まっていて（その町のなかでは）にぎやかな町の中心地」というイメージであることはわかると思う。この「イメージを「東京」に当てはめると新宿や渋谷のイメージで「繁華街」でもよさそうだが、「町には信号機が２機しかありません」という町だったら、「繁華街」では合わないだろう。では、このランドルフの町はどういう感じなのか？　を読み取る必要が出てくる。これは文章を通読して、ヒントを探す必要あり（または、ここは仮の訳語にしておいて、あとで最後まで読んでから、戻ってくることにする）。

パラ４で、"if the town's concern was the downtown area"という文があって、downtown area が単数になっていることを発見！　一箇所だけを指しているらしい。それから、お年寄りが日常的な買い物をする場所らしいこともわかる。これでは「繁華街」は違うなあ。何となく小さな町の「中心街」「商店街」って感じね。

「ランドルフの町では、とりわけ商店街の歩道がスケボーにうってつけの場所なのだった」にしておこうか。

「なかでも、ランドルフの町の商店街にある歩道は、スケボーにピッタリ」でもよさそう（この場合は、一文目を少し変えないと、「ピッタリ」が続くのはちょっと……という感じになるが）。

ここも「早く続きが読みたい！」と思うようなイキイキとした文章にする（ただし、正確であることが大前提）という学習ポイントなので、いろいろとくふうして試し、感じてください～。

6）文の後半、**because the town is built on a slope, the sidewalks making a natural hill for the skateboarders.**は、訳しあげずに、「～からだ」「というのも～」と続けて訳した方がリズムが出てよさそう。後ろから訳しあげると、どうしても文が長くなること、ぎこちない感じがすることが多いので、「どうしようかな？」と考える。後ろから訳さないとわからない場合は別だが……。

on a slope は「斜面の上にある」「坂になっている」「傾斜面の上に作られている」など、いろいろな訳し方ができるが、自然にすっと読めるのはどれかな？　（ここは特に重要な意味のあるところではないので、ひっかからずに読めることが大事）

「町が傾斜面に作られている」というのは正しいが、あまり情緒がないなあ。建築に関わる記事ならいいんだけどね。ここでは「町が丘に立っているので」「丘に立っている町なので」「丘の町ランドルフでは」ぐらいにしておこうか。

「丘の町ランドルフでは、何もしなくても歩道の勾配がスケボー少年たちにはおあつらえむきなのだ」

ほかにもいくつか訳例をあげてみるので、それぞれ「感じて」みてください。

・ランドルフの場合、とりわけ中心街の歩道は、最高のスケート場だった。ランドルフは坂の街で、歩道がもともとスケボー少年たちにはちょうど良い勾配になっているからだ。
・ランドルフでは、中心街の歩道はなんてったって最高の場所だった。というのも、町が斜面の上にあるので、歩道がちょうど良い具合に自然の勾配になっているからだ。
・なかでもランドルフの繁華街にある歩道は、スケボーにぴったりの場所だった。坂の街なので、歩道がかっこうの天然スロープになっているのだ。
・ランドルフの町では、繁華街にある歩道はとりわけスケートボード遊びに向いていた。というのも町全体が傾斜面上に作られている為歩道がスケートボードにうってつけの坂道になっていたからである。
・ランドルフの町は、町全体が斜面になっていて、自然の丘に歩道があるのでスケートボードにはもってこいです。
・ランドルフ市はなだらかな高台に位置しており、市中心部の歩道はゆるやかに傾斜しているため、格好のスケートボード場になっていました。

最後の２例は、because の前で切らずに、全体をまとめて訳した例。もちろんこれでもＯＫだが、最終判断は、段落の最初から通して読んだときのスムーズさやリズム感で決めること。

7）The town had gone to some trouble to put in new sidewalks, ramps, and other pedestrian amenities,

ここでの town は「～町」という町ではなく、地方自治体としての「町」であることはわかったかな？町のインフラを整備する役割を担っていることから、行政の主体としての「町」であることがわかる。日本語では、そのまま「町が」と言うことが多いが、「～町」との区別をより丁寧につけるなら「町役場」など、行政の主体であるイメージを出せばよい。こういうときによく「当局」という日本語を使うのだけど、「町当局」というのは、小さい町には不釣り合いな気もするので、「町では」「町役場では」ぐらいでよいのでは。

さて、この文章は、誤訳しやすいところ。誤訳例を挙げよう。

・歩道を舗装したり、スロープを取り付けたり、歩行者用の設備を新設したりするのに問題が生じました。
・町は、新しい歩道や傾斜路や歩行者用の設備を取り付けることが困難になっていました。
・この町で、新しい歩行者用の設備を作る際にちょっとした問題が起こりました。
・この町が歩道、スロープ、その他の歩行者用設備を新しく設置したところトラブルに見舞われた。

誤訳の原因は、go to some trouble to～（～しようと苦心する）を、get into trouble（問題を起こす）と混同したこと。たとえ、誤訳をしても、全体のつながりがおかしい！　とあとで感じられれば見直して修正することができる。最初から誤訳をゼロにしよう！　と考えるより（それは無理というもの）、自分の誤訳にどうやって気づくか、という誤訳検出器（感覚）を磨く方がずっといい。つまり、誤訳してしまったことを反省するより、誤訳に気づかなかったことを反省すべき。全体を読んだとき、うすうす「何だかへんだなー」と思いつつも、そのままにしていませんでしたか？

もうひとつ、気づくきっかけになるのは、had gone to some trouble to は過去完了で、次の and の動詞 were は過去であること。まるでかすかな手がかりをもとに犯人を割り出す探偵みたいだが、こういうビミョーなところで、物事が起こった順番がわかって、訳づくりの大きなヒントになったりするのである。

go to some trouble to は「苦心して」「苦労して」「労力を注いで」「手間ひまかけて」などとも訳せるが、

ここは「町ではわざわざ新しい歩道やスロープなどの歩行者のための設備を作ってくれた」ぐらいでもよさそう。最後まで続けると、「これまたスケボーにピッタリなのだった」という感じかな。shape を文字どおり「形」と訳そうとすると、ぎこちなくなる。ここでは「状態」を表している感じ。

8）The skateboarders were having a great time.

いくつか訳例を挙げよう。段落の最初から読んでみて、「ピン！」と来るのはどれかな？　どれかを改変したらもっとピン！　と来そう？

・若者たちは大喜びである。
・若者たちが盛り上がったことといったら！
・若者たちは最高に楽しんでいた。
・スケボー少年たちは大はしゃぎである。
・スケートボーダーは大満足でした。
・子供達はスケートボードを多いに楽しんでいた。
・スケートボーダー達は思う存分楽しんでいた。

Part of the **9) joy of the sport** is **10) the showiness** of it—so being right downtown with **11)a ready-made audience 12) met their needs perfectly.**

9）joy of the sport もいろいろくふうが楽しいところ。「このスポーツは何が楽しいかといえば」と説明調でもいいし、「スケボーの醍醐味」もいいねぇ。「スケボーの楽しみのひとつは」でもいい。

10）the showiness もくふうしどころ。「見せびらかすこと」「目立つこと」「脚光を浴びること」「人目を引くこと」などなど。この一文だけで何通りも訳文ができるはず。その情景を思い浮かべながら、いろいろと作ってみて、「感じて」みよう！

「スケボーの楽しさのひとつは、『目立つこと』である」ぐらいか。「～のひとつは」「～の一部」は英語でよく出る言い方だが、日本語ではぎこちなくなることもある。「スケボーの楽しさは、『見てもらえる喜び』でもある」と、「でもある」にそのニュアンスを入れてしまうこともできる。

11）a ready-made audience　ここの ready-made って、ちょっとユーモアを込めているのだと思うけど、実際には何を指しているかをまず考えること。（英語の文字から日本語文字へジャンプしないこと！）

にぎわっている商店街のど真ん中でスケボーをやったら、まわりの買い物客たちがそのまま「ギャラリー」になるから、そりゃうれしいわな、という感じね。

12）met their needs perfectly は、needs をどう訳出するかどうかが考えどころだが、「ニーズ」というと割とかちっとした経済・社会学的イメージになるので、どうかなあ……。いくつか訳例を挙げてみよう。

・スケボーの醍醐味といえば、「目立つこと」を抜きには語れない。そう、おあつらえ向きのギャラリーまでいる繁華街のど真ん中で滑るなんて、少年たちのニーズにまさにぴったりだった。
・このスポーツは何が楽しいかといえば、ひとつには、派手に見せびらかすことだ。だから、ちゃんと観客が用意されている繁華街のど真ん中でパフォーマンスするなんぞ、それこそ願ったりかなったりのチャンスなのだ。

・スケートボードの魅力は、「目立つ喜び」抜きには語れない。そう、商店街の真ん中でギャラリーつきで滑るの

だから、彼らの思いは十二分に満たされていた。
・パフォーマンスを観客に見せるというのも、スケートボードの楽しみのひとつですが、沢山の観客がいる市街地はボーダー達の望むもの全てが備わっていたのです。
・このスポーツの楽しみのひとつは滑る姿を人に見せることなので、観客のいる中心街は彼らのニーズを完璧に満たした。

最後のふたつは、二文に分けずに訳した例。
「スケボーの楽しさは、『見てもらえる喜び』でもある。商店街のど真ん中なら、たまたまそこにいる人たちがギャラリーになってくれるわけで、願ったりかなったりなのだ」ぐらいでどうかな？

****
【パラグラフ２】
1) All was not well, however. **2) Elderly pedestrians didn't like 3) risking life and limb 4) when they walked out of a store only to find themselves in the middle of a skateboard stunt ramp**. Store owners complained. To make matters worse, skateboard wheels often **5) left grooves** in new and expensive sidewalks, so **6) the town was faced with damage** to its brand new infrastructure improvement project**.**

エダヒロ訳
ところが、万事順調というわけにはいかなかった。商店街を歩くお年寄りの身になってみたら、店から出てきた途端、歩道で繰り広げられている曲芸のごとくパフォーマンスの真ん中に放り込まれるようなものであって、「骨折覚悟、命がけの買い物なんてまっぴらごめん」である。店主たちも口々に苦情を言うようになった。さらに悪いことに、せっかくお金をかけて作った真新しい歩道なのに、スケートボードの車輪があちらでもこちらでもガリガリと跡を残すものだから、町としては、真新しい社会基盤整備計画がうまくいかなくなるおそれが出てきた。
****
1）**All was not well**, however.
この all は「全員」という意味というより、all＋否定でよく出てくる「部分否定」として考えよう。余談だけど、私はこういう all とか well とかいう誰でも知っている単語を辞書でよく引く（難しい単語より、よく引いていると思う……）。
そして、繰り返しになるけど、こういうシンプルな文をどれだけいろいろなバラエティに訳し分けられるかが重要。「会社の社長向け」「国会議員向け」「お年寄り向け」「子ども向け」「若い女性向け」などなど、くふうしてみて。楽しいですよー。いくつか今回の課題に即した例をあげておこう。

・ところが、世の中、そんなに甘いものではなかった。
・けれども、良いことずくめではなかった。
・しかし全てが都合よく行っていた訳ではない。
・しかしながら、すべてが万々歳というわけにはいきませんでした。
・しかし、万事がうまくいったわけではありませんでした。
・しかし全てがうまくいった訳ではなかった。

2）**Elderly pedestrians didn't like 3) risking life and limb 4) when they walked out of a store only to find**

themselves in the middle of a skateboard stunt ramp.

2）**elderly pedestrians** は、「年配の歩行者たち」という意味だけど、英語ではこのように名詞形になっていても、日本語にするときは動詞にしたほうがしっくりくる場合がけっこうある。ふつうの会話で「歩行者たち」って言うだろうか？　と考えてみること。商店街で買い物をして歩いているお年寄りのイメージが浮かんでくれば、それを「英語は名詞形だから」と縛られずに、もっともわかりやすく読みやすい日本語にすればよい。

3）**risking life and limb** は、辞書を引くと熟語として「命を賭ける」というような意味があるので、もちろんそれをそのまま使ってもいい。でも私は、今回はもともとの意味（生命や手足を危険にさらす）に近づけて訳したい気分。スケボーの群れに囲まれても命を落とすことはないだろうけど、お年寄りだったら骨ぐらい折ってしまう危険はあるわけで、いきなり「命がけ」というより、risk limb のニュアンスを入れてもいいかなー、と。「手足や生命を危険にさらす」とそのままではあまりに直裁的というか、情緒がないので、くふうは必要だけど。たとえば、「骨折覚悟、命がけの買い物なんてごめんだ」とかね。

4）**only to find themselves in the middle of** のところは、「結局のところ～となってしまった」「そんなつもりはなかったのに、そんなはめに陥ってしまった」というような雰囲気が出るといいね。お店から出ただけのつもりなのに……という感じね。

この文は、「早く続きが読みたい！」と思うようなイキイキとした文章にするという学習ポイントの好例なので、いろいろとくふうしてみてください～！

To make matters worse, skateboard wheels often **5) left grooves** in new and expensive sidewalks, so **6) the town was faced with damage** to its brand new infrastructure improvement project**.**

5）**left grooves** は「溝を残した」ということ。どういう情景か想像できるよね？　真新しい歩道……滑走するスケボー……金属製の車輪が新しいコンクリートに跡を残していく……。ここで「溝を残す」だけでもいいのだけど、もうひとくふうしよう。この情景から音が聞こえてきませんか？　ガリガリというコンクリートを車輪が削ってしまう音が。

英語には擬音語や擬態語がない。でも日本語にはある。使うことが適切な場合は、「ガリガリと」などと補うと、日本語らしい文章になる。「英文のどこに『ガリガリ』があるんだ？」と気になるかもしれないけど、英文にないからといって使わないことにすると、あなたの訳文には絶対に文章をイキイキとさせてくれる擬音語や擬態語が出てこない、ということになる（だって英語にはないのだから）。その情景を適切に描写するのなら入れるべき、と私は思う。

6）**the town was faced with damage** の訳もいろいろとあって、くふうできる箇所である。正確さを失わずに、イキイキした文にするにはどうしたらよいか？　いくつか訳例を挙げてみよう。なかには「著者はそこまで言ってないよ」という行き過ぎの例もある。ひとつずつ自分なりに評価してみよう。自分の訳文もね！

1）痛手を負うこととなった。
2）頓挫しそうな雲行きに見舞われた。
3）けちがつくこととなった。
4）台無しになってしまうという現実と、向き合わざるを得なくなったのだ。
5）ダメージを被りました。

6）損害を被る結果になった。

7）プロジェクトが傷つけられたという問題をつきつけられました。

8）傷跡を目の当たりにしました。

9）損失に向き合わなければならなくなった。

10）損害に直面した。

ここでのポイントは「damage」の訳し方と、「be faced with」の訳し方。後者から言うと、be faced with は「直面する」ということなので、「直面した結果、どうなったか」までは言っていないと思う。このままいくとそうなっちゃうよ、という感じはあったとしても（私は、be faced with と言われると、「顔の真ん前に突きつけられている」イメージが浮かぶ）。そこで、１）、３）の「痛手」、「けち」および２）の「頓挫」まで書くと、「行き過ぎ」と判断されてもしかたない訳文となる。

「ダメージ」や「損害」ならよいのか？　どう違うのか？　「痛手」「頓挫」は書き手の感情やニュアンスが入った言葉だと思わない？　ここでの damage はもしかしたら「痛手」かもしれないし「頓挫」かもしれない。でも著者がそう明らかに言うまでは、翻訳者が推測での感情やニュアンスを入れた訳文を作ってはいけない。読み手は、著者の込めた感情・ニュアンスだと思って読むから。

私は「著者の書いた部分から明らかなウラが取れるまでは入れない」ことにしている。余計なものを追加してしまうより、もしかしたらちょっと足りないほうがまだマシ（それこそダメージが小さい）のではないか、と思う。一度、ある感情やニュアンスを与えてしまうと、そのイメージはなかなか消せない（あとで修正できない）。確証が得られないので控えておいた場合だったら、次に出てきたときに付け加えればいい（実はこれは通訳の原則でもある）。

damage は damage to its brand new infrastructure improvement project.となっているので、ここではスケボーの傷という意味ではなく、プロジェクトへの damage である。「損害」のことだけど、このままだとこの文章には堅すぎるかもしれない。プロジェクトがうまくいかなくなるおそれが出てきた、という感じだよね。「痛手」「頓挫」「けち」「台無し」は強すぎて、「そこまで言ってないよー」と著者に言われそうである。このあたり、「イキイキとわかりやすい日本語にする」ことと「著者の言っていないことやニュアンスを付け加えない」ことを両立させるよう、気をつけて！　どうしても両立しない場合は、前者を犠牲にすること。「正確さ」が大前提で、そのうえでの「読みやすさ」である。読みやすさを優先して、正確さを欠くのは本末転倒であり、こういうクセのついてしまった翻訳者は、自分はうまくなった気がするかもしれないけど、絶対に使い物にならないので、気をつけること！　「そこまで言っていないかも」とチラとでも思ったら、引き返すこと！

上記の訳例で言うと、１）～３）は読みやすいが、正確さからは９）～10）のほうがよい。いろいろと好みはあるだろうけど、私だったら９）～10）の訳をする人の日本語の表現力をアップする手伝いをしたいなあ、と思うことであるよ。

☆

エダヒロ訳

若い子たちはスケートボードが大好きだ。歩道も身障者用スロープも、この子たちの目には、「スケボーにピッタリ！」 と映る。ランドルフの町では、とりわけ商店街の歩道がスケボーにうってつけの場所なのだった。丘に立つ町なので、何もしなくても、歩道の勾配がスケボー少年たちにおあつらえむきなのだ。町では、さらに新しい歩道やスロープといった歩行者のための設備を作ったのだが、これがまたスケボーにうってつけ。若い子たちは思う存分楽しんでいた。スケボーの楽しさは、「見てもらえる喜び」でもあるのだが、商店街のど真ん中なら、たまたまそこにいる人たちがギャラリーになってくれるわけで、願ったりかなったりなのだ。

ところが、万事順調というわけにはいかなかった。商店街を歩くお年寄りの身になってみたら、店から出てきた途端、歩道で繰り広げられている曲芸のごときパフォーマンスの真ん中に放り込まれるようなものであって、「骨折覚悟、命がけの買い物なんてまっぴらごめん」である。店主たちも口々に苦情を言うようになった。さらに悪いことに、せっかくお金をかけて作った真新しい歩道なのに、スケートボードの車輪があちらでもこちらでもガリガリと跡を残すものだから、町としては、真新しい社会基盤整備計画がうまくいかなくなるおそれが出てきた。